赤石

拾三

13

△明石 十三冊目 花鳥云以歌并詞爲巻名源氏廿六ノ三月十三日ニ須广ヨリ明石ニ浦ツタヒシ給フ
廿七ノ七月帰京ノヿニテ二年ノ間ノヿ此巻ニ見タリトヽ廿五ノ三月ヨリ廿六ノ三月ニテ
須广ニ居玉ヒ同三月ヨリ明石ニ移リ廿七ノ秋迄明石ニ居給ヒ都合三年ナリ
△猶風雨ヤマス 花云三月朔日ヨリ同十三日迄雨風ヤマス神鳴サハク也是ハ未須广ニテノヿヽ
周ノ成王ノ寸周公ノ弟ニ管叔蔡叔ト云ニ諸侯周公ヲ讒ス是ニヨリテ周公東都ニ居ルヿ二
年其ハ秋天大キニ雷電シテ风吹テ粟コト〻ク倒レ大木ヌケタリ成王其寸書ノ金縢ノヲヲヒライテ
見玉ヒテ周公王室ニ功アリテ無処ロヿヲサトリ給フ其ハ時風雨忽ニヤミ粟悉ヲキ大木ノ倒タル
モ皆本ノ如ニナレリ是ハトガナキ周公ヲ二叔ノザンニミシタルヲ成王信シ玉ヒシヲ天下怒ヲナシメル故
也成王ノ思ナヲリタメニヘルニ依テ草木本ノ如クナセリト云リ今源氏ヲ周公ニ准ヘ十三日迄ノ
雨風トハ云リトヽ細流ニ三月朔日上巳ノ後ノヿ也ト云ヽ花ノ説可然ト也
△イカニセンカヽリトテ又 花云帥伊周公 内大臣 幡广ノ國ニ下リテ後又ヒソカニ都ニ上リテ母君ニ
アヒ給ヿ聞エ有テ重テ罪ヲモソノ東ニ太宰府ヘ流サレ玉ヘリ栄花物語ニ委トヽケ佐ノ
ヿヲ思給テノヿ可成
△御夢ノ日ハスミノ巻ニサバウミノ中ノ龍王ノ見給夢ト同如ソヽト
歌數二十八首

△なほ雨風やまずかみなりしづまらで日ごろに成ぬ
いとゞものゝわびしきことかずしらずきしかた
ゆくさきかなしき御有様に心づようしもえおぼし
なさずいかにせましかゝりとて都にかへらん事も
まだよにゆるされもなくては人わらはれなること
こそまさらめ猶これよりふかき山をもとめてや跡
たえなましとおぼすにも波風にさはがれて
なんど人のいひつたへんことのちの世までいとかろ
〴〵しき名をやながしはてんとおぼしみだるゝ御
夢にもたゞおなじさまなるものゝみきつゝまつはし
聞ゆとみ給ふくもまなくてあけくるゝ

讀杜艸堂

はうれりさへて京乃かたもいとゞおぼつかなく
かくながら身をはふらかしつるにやと心ぼそう
おぼせどかしらさし出べくもあらぬ空のみだれに
いでたちまいる人もなし二條院よりぞあながちに
あやしき姿にてそほちまいれる道かひにてだに
人かなにぞとだに御覧じわくべくもあらず
まづおひはらひつべきしづのをのむつましう先よ
おぼさるゝもわれながらかたじけなくくしにける
心のほど思ひしらるゝ御文にはあさましくを
やみなき比のけしきにいとゞ空さへとぢたる心ち
してながめやるかたなくなん

浦風やいかにふくらん思ひやる袖うちぬらし
なみまなきころ哀にかなしき事どもかきあつめ
給へりいとゞみぎはまさりぬべく
かきくらす心ちし給ふ京にもこの雨風いとあやしき
物のさとしなりとて仁王會などおこなはるべしと
なん聞えはべりし内にまいり給ふ上達部なども
すべて道とぢてまつりごともたえてなんはべる
などはかばかしうもあらずかたくなしうかたりなせど京乃
かたの事とおぼせばいぶかしうておまへにめし
いでゝとはせ給ふたゞ例の雨のをやみなく
ふりて風はときどき吹いでつゝ日ごろになりはべるを

イトカクヨリスヘシ
地ヨリコシトシルハヤリハ
地ヲチヌメルヤト云ノ

ヒフリ　雨敢フル
長和二年三月雷
鳴氷降大如梅
子ヽ

例ならぬ事におほくのかはいとかくちのうち、
ともなひの日かはりのはちの志ほまつぬ事は
侍らずはきなどいふじきことありおどろきおちさく、
なるりかのいとうしこさふもうほゞうさまさわりる、
かくしはよはほゞぬべきものやとおぼさ給ふ、
まえの日の暁よわ雨いかしうやき塩ゑかりちて、
浪だち音あらく浅しとものかも山もおちるまじきこと也、
かくのなはひしめくさゑさしよいりんうしなくて
おもうしてぬ心おほかゆるにあらなずわさうしお人
なし我もいつあるつえなをかしてかくのかしき
め城へうしんちて母にもあひらばなかしきめこれ

花云住吉ノ神ハ往来船ヲ守リ玉ヒ神功皇后新羅ヲ平ケ給ヒシ以来幣シ川ヲ入道(?)ソモ...待ケル...シキ円細ク吹タルヨシハ下ニ人エツメリ...ナクコトナクヨリ祈玉ヘル故ニ御井ニ神感アリケリ給トいい

我が城もうで志ぬべき事とおぼしけく君は御んと
志ばめてなよりかのあやまちてあおのなぼさふ
京をはきていめん心つよう思ひしふさといと猶さは
うしく進みさ此ぞでぐらけうを捧て侍るよし
乃あかんちの寿さうひを志ばめまりわ捧給ひとり
阿とをたまへ竹ふ神なるいたすを竹へとおかくの
大願をとそ捧ゐのくるがばるる此りのちをかさ給
もれまてかく給清力のまことある例ありし志ばゝ捧ぬ
遍まな事此吹しうるまりきまもる給城なきしに
まし物覚ゆ給ふ也力をりんてこれ清力ひと清を
すくひまるむ心よりてもけ給あり石とけ神城

古今ノ序ニ又ニスキ风ウツノシミノカケ

天神祝文作七日七夜风ジメテキテ三貝涙文天ニノホリヌトシ
離家三四月落涙百千行 蘆鳳
左傳云公卿非王命不越境

然しまふていかうの山深きやり庭はありまし
あまひてきこ乃みれしみはをあきしうかうし
小き清うはなしゝおもまかまのまま旅く士は
めゝともかうをかうおかくうの路しかとかの
むくひゆかうこらよこさまなる波風ありておかまし
路ゝん天地ちとりわ路へはえなくてはとふかわ
清のさくらぬをとうま道旅をたまさらひとさわて
ゆくれしや浪まようなくあけさ路ふかりくのまき
め路さん見奈はまなんとはふいおの世れむくひあ
然世のなきうしうと神なとけはよらうるまし
国さはいれうれへ度はめ竹へ見みやしのれうさに

大井殿ト一殿十ト國ニ堂町ト同事也

帰来倚杖自欲息機頻風定雲墨色

むなそはまくの就とたそ路ふ又海乃中の路と
よ海は乃神たち小舩たそ皓ありいよくなわかさる
きそおりしまんよはいきたるらうよおちうくまぬ
なのはもえわりてらうやきぬちゝ路たまゝぬ
なくてわなはなとふうし路乃うさな深おならのと
あかしきやかかはしまわて上下とあくさここえて
いきなきうありしをなきかうよせらうのはちまも
おどろいて雲ち墨路はわたる度うみて白をなまきり
かわ度うくく風な路星雨乃あしさめわかしの空まで
もえゆふりこのねまし風乃いとめはうなふを
思ふうしけなくてきんてんかうはしまうんせ

ある小屋におましたゝりしこもうとましげなるところの
人のふみとゞろかしまどへるに御すだれなどもみな吹
ちらしてけり夜をあかしてこそはとたどれば
君は御念ずし給ひておぼしめぐらすにいと
こゝろあはたゞし月さし出てしほのちかくみちける
あともあらはになごりなほよせかへる浪あらきを
柴のとおしあけてながめおはしますちかき世かいに
ものゝ心をしりこしかたゆくさきのことうちおぼえ
とやかくやとはか〴〵しうさとる人もなし
あやしき海士どもなどのたかき人おはする所とて
あつまりまゐりてきゝもしり給はぬことゞもをさへづ

花云住吉ノ明神ハ
ノミシノハヤアノ塩ザ
ヨリ浜出給神ナルニ
ヨリテ海ニマス神トハ
申侍又海中ノ龍
王ニ乱シタテマツ由
上ノ文ニアレハ竜神
ヲモ神トイハンニ
相違アルマシキニヤ
西ニ アラシホノ ミホノ
ヤホアイニヤクシホノ
カラクモ我ハ老ニケル
カナ
イリモミツルハ陽ノ
アルヽナリ モミニモ
フデ吹ト云ル也

りあへるもいとめづらかなれどえおひもはらはず
この風いましばしやまざらましかば潮のぼりて
のこる所なからまし神のたすけおろかならざり
けりといふをきゝ給ふもいと心ぼそしといへば
おろかなり
海にます神のたすけにかゝらずはしほの
やほあひにさすらへなまし日ねもすにいり
もみつる神のさはぎにさこそいへいたうこうじ給ひに
ければ心にもあらずうちまどろみたまふかたじけなき
おましなればたゞよりゐ給へるに故院たゞおはし
ましゝさまながらたちたまひてなどかくあやしき所

よは物いふぞとて はまをとかて ひるたて給ふ住吉乃
うみもみちひぬ給ましけりや かなぞしてこれ
うつをさま給との給ひしと いひしけれ くそかしこふ
たうげふかのまづわりしさふこはまくうなりき
すり乃見おかく侍まだしきこれなぞさうなるをや給
侍なましかう我こえたまへはいとはかまし我しと
さまはただいさしうあるものくむくひなかりまいは
くも井ふあわし時あやまはことなりまちしど
なかつうらなしわかなましうれはぬをれ小家雅
いとまなくてよをかへりんざわはまどいうしき
うれへよ志ぼむをみるにさんかさくそうえふりわ

ナサケラカヘリニカリ
ワレドモノ行ニ年比
夢ニ見玉ハサルト
云下ニテ首尾スル
十カリ
孔子此世ニ一度ニ
ユスト十リ
延喜ノ川ニ天子ニハ無ク父母トノ詞古語ニアリ

杜子美 夢李白
落月満屋梁
猶疑照顔色

なぎさ乃のかいたきごうじありまとおかは
つれてみだりわよ萎はべ我すあかりよわなん
いら我のぼわぬるとて立さわ給ぬはりまどうれしく
て帰りともに来まなんとなむいわ給そみはる紗く
まつ人もなくて夙おかのみきうしくかうしても
夢のうちもまぼろしひとままはんちしてたる
雲衰よみなびくわとし時ゆめ乃まちふもみをまて
こひしうおほけのあさけ千歳我かれのなまかう
ふかりおえまわけるこのもみ雨教おわかえて我かく
うかしえときいめいのちはよなんかうしけるたり
たぞさ老はうけ里妙へ物とこのまよ托ほにはよまく

子ヌル夜ノ夜ヲハカ
十三日トロメハ

あはれにおぼすによくぞかゝるさはぎもありけると名残たのもしう
うれしうおぼえ給ふことかぎりなしむねつとふたがりてなかなかなる
御心まどひにうつゝのかなしきこともうちわすれ
ゆめにも御いらへをいますこしきこえずなりぬる
事といぶせさにまたやみえたまふとことさらにねいり
給へどさらに御目もあはで暁がたに成にけり
なぎさにちいさやかなる舟よせて人二三人ばかりこの
たびの御やどりをさしてくなる人ならむとゝへば
明石の浦よりさきのかみしぼちの御ふねよそひて
まゐるなり源少納言さふらひたまはゞ対面して
ことの心とりまうさんといふよしきよおどろきて

舟ニイキテ前ニ入道舟ヨリアカリタル方ニ見ユル也今良清行テ十七八前ハ使ニ成

入道ハ三月一日ニ告アリ須磨ヘテ上巳ノハラヘノ日ニ源ハ十三日雨風止ケル也
周公解夢書云
一日正夢二ニ悪ニ三日思ニ四ニ寤ニ五ニ善ニ六ニ懼ニ

入道はかの国のとくいにて年ごろあひかたらひ
侍りつれどわたくしにいさゝかあひうらむること
侍りてことなるせうそこをだにかよはさでひさしう
なりはべりぬるをなみのまぎれにいかなる事か
あらんとおぼめく君の御夢なども思しあはする
ことゞもありてはやあへとのたまへば舟に
いきてあひたりさばかりはげしかりつる浪かぜに
いつのまにか舟出しつらんと心えがたく
思へりいぬるついたちの日の夢にさまことなる
物のつげしらすることはべりしかば信じがたき
ことゝ思うたまへしかど十三日にあらたなる

人心門史記殷本紀曰帝武丁即位思復興殷而未得其佐三年不言世事決定於冢宰以視國風武丁夜夢得聖人名曰說以夢所見視群臣百吏皆非也於是乃使百工營求之野得說於傅巖中見武丁々々曰是也得而與之語果聖人舉以為相殷國大治武丁殷高宗也

しるしみせん舟よそひまうけて必雨風やまば
此うらにふねよせよとかねてしめすこと乃侍りしかば
こゝろみにふねのよそひをまうけて待侍りしに
いかめしき雨風いかづちのおどろかし侍りつれば
人のみかどにもゆめを信じて國をたすくる
たぐひおほう侍りけるをもちひさせ給はぬまでも
このいましめの日をすぐさず此よしつげ申
侍らむとて舟いだし侍るにあやしき風ほそう
吹て此浦につき侍る事まことに神のしるべ
たがはずなんこゝにもしるしある事や
侍りつらんとてなむいとはゞかりおほく侍れどこの

ウツヽノ人両義アリ現世ノ人ノコサヘアルニミシテ神ノ告ヲタノミザルヘキニヤ又現世ノ人サヘ神シタノムニミシテナ近キ身ニ
我ヨリハ上 花云是ハ出而人ノ云コトニ可順申ヲ云ヽ我ヨリ年ニサリ又高位ノ人又時ノ權門ナトノ云コトニハ何モアヒ可從ノ心ナリ明石入道ヲ源ヨリハ勢ニサリタルゼハナリ

よし申給へといふよし思ひ合すふしもや
君おぼしめぐらすにゆめうつゝさまくしづかならず
ならずさとしのやうなる事どもをきしかた
ゆくすゑおぼしあはせて世の人のきゝつたへんのちの
そしりもやすからざるべき事をはゞかりてまことの
神のたすけにもあらんをそむく物ならば又これより
まさりて人わらはれなるめをや見んうつゝの
人の心だに猶くるしはかなき事をもつゝみて
我よりよはひまさりもしは位たかくときよのよせ
いまひときはまさる人にはなびきしたがひてそ
心むけをたどるべきものなりけりしりぞきてとがなし

タドルヘキハ可尋ヽ 花云此退ハ人ノ跡ニ付テ位ヲ退ノ類ニアラス 易云知進而不知退 老子云不退有咎

省ブク 羽吹ん

あしとこうせうしのさうしきゝ人もいひ置かれたなふ
かくれかのちをききえぬよふふ又なぐさめ見れはをみろく
はざまりゐたちの河とれな我いぶくとても心けき
事もあらじゆめ乃中にもちつえうどの御
をしへあわはまざまこなきにとをかうがりんと
おがりて法あるへわの縁まつらぬ世界りめはらしき
うれへのりきわみはまぼ旅乃うこすわとてことゝひ
をこはぶ人をなしたどり深なき夜乃月日の
ひかりわだらわを故やれとうもとながめ侍よふまうしき
つわ心よ我なんゆうみれ浦にに思ぼやうによかくろふべよ
波待わあむやとの絶ふ限なくよ猿こびしこまわ

波ニノミスレスル猶ヲ
吹風ニ便ウヒニキ
アニノ釣ノミ

先やウニ播ノ
風土記云雅波ゝは
宮時日之ノ驛家
駒手ノ北井ノ楠木
ヲ切テ舟ニ作其
早キ了先カ如ニ一カ十二七波ヲ
先ニヨテハヤトリトリ名ツク
住吉ノ大倉ムキテノ
トベハコソハや島ト
イハメイウヒハや鳥

ゆしもともはま近くもわき夜はあけたてぬさ花よ
清心よりきとて例乃たえさし来ぬきわ四方人
ぞうかしてまわぬ道の風いぞをそとぶ屋うずり
うしよはよ経ぬまずりひわる深経そうこともよ乃
まゐといふ色どあ我わやしきまでみゆるうをれんなか
そ夜の清まげよいぶこう絶きとをなわ人ぶげうえゆ深
乃見なん御心ようむきをる六道のらうしまあ
こ深衆こ海の情うかも山うくれゆとも時こよつきて
たぶとさうはべ我なきさ乃ときに屋をこなひをしもて
枝見世乃ことを思ほましつべ善山水のつらゝり
以うめしきずうを立てこまのなをこなひさかまれ

法花三昧し

拾遺ノ屏風ニ稲ハ
コハセルカタチヲルニ
ヨメル　忠見
秋毎ニカリツル稲ハ
ツミケレド老ニテル
カソシキ可ナシ

まうけゝる秋は、みれゝをうわおきめのこわ乃よりひ
ろむへ義いろゝれくろまちなとおかくとこ様に
はきたるみどころはわてしあはめするたるしかる
おちていれ出様もとめ本をいは城りへのやどようは
しても まさけまは、いれは道のたちにこ様屋すく
おりしまん女よわは車よあわうはるほど日やう
屋うふしわうわてたのうかえあかすよわ老もまは達
船のふはんもちしてゐきさうへてまはほくより乃
神をいのりくれかくあは月日の光城をみえあわ
いるんもちしていとなくはかうまつふすことうわ
あわはるのさ様をあさうみもいえはほくわあしたる

こ様だく未をたてりし お載などの有様えもいはぬ
へはのれなとゐふうしきんのいふわすくふりしむ
ゐしいえ乃義をよふまし心兄田月こ様乃御し
はまのすわいこよなくはきうのふあはりしは志は
らひなどえなうはしても反井老はらまなと塁よ
鄙の屋んじとあさとこ様くにおとなう乃えんか
まばゆきはまいはさわざ様みず兄ゆふすしはん
志はまわて京乃御ぬことさてえ船菜まわし
つうひもいまいいえしきみちにむさらさかあしさ
めをみるとなあ志はみえてわ乃はまよとまわたるを
めして力かあまま達はもれども酒ほく船てつまりは

スヽノ巻ニ紫ノ君
別テモ新ダニトニル
モナラバ鏡ヲミテ
モナノサイテニシ
ヤク光東ナキトカ故
ヘンリテ析ニシ
トウレシキクヲタノミ
ミテ世ツノガレザル
トし

むつましき人のものしともさるべき所々には、
此程乃事有様なりしくいひ侍りはせへしへ院乃宮
づかはぬはじめ侍らうめでたくよみ人まかさ侍などゆかしく
おぼし除院乃あまれ殿しおとの事とへ何かは義も
座わおぼり侍うちきこく其のこひはしきこえ給ふ
侍気色をしとなわかへ侍く思しさめれ給へ
みばしまそ侍るわかさ侍なれば何まえとよ殿也ひ
ものあはれの侍うわ侍まとうしみを見ても知る
の物ひし西行がなあはれなきをかくおぼえ侍る
なぐさめやとこしらへるきほまく比られし
さはさりとおもはれて、

スヽモアカシモミラ
サリシウラし

アサリスルヨサノアニ人
ホコルラニ浦風ヌルミ
ヲレメナヒク

侍るうまもおりひ座るう肌志てさわしうえ
まわをち小浦づたひして夢乃中なるんちのみ
よそさあまそぬかといよまひのおもとおあすらん人々よ
すくこそう覧なくうおもふる所へ侍しもぞいとみ侍
おりきうばめなる殿いとこうよなきよ侍んさしの雑と
人々みさそまほふをのくあれやりんほうげな侍
ちとばそすべうめわをやくなうわしそうの気色
名殘なく思えわさまてわさわすふ侍まとも侍うう
さげなわ侍まはいとう侍ほうくて侍ま乃いをみ座も
まれなりしを人しかよいとひたまふ所しかのう
あくえみさ侍ことに哀なる事をおぼえてよ侍ふ

紫若菜三ノ良清が浪ニテ云ほし

ホトフルモ是也 オモホエズ云ニ又 トハヤリハニモ

おぼしなぐさまぬ折、右のおとゞの、なびきとめたる
さまいとゞ思ひまさりける程、みこたち姫君たち
まで、まつはれ給ふさまにて、いとあはれなる浅まで、
ときくもらしつゝまへ、此御はらからおはしまして
きこえさせ給ひし人なりけるが、おぼえなくそめくる
おはしたるもさばかり契りおほやけにおぼしなりて
なきかうちかぎりよしなきほどにまかでひなかし
まうで思ひし都乃人もたゞなる人はひとしよ
たまふ心もおぼさんもんじゆのしうおかされまくりは
気色だちたまふ、ゆゑともまたおほきおほきみ
なべておかしくも、さすがにゆかしうおぼされぬ

髐 サラボフ ヤセタル形し

見しもおほかた、ゆゑあしこまかに給へりける
おほくもいらずりの海だにみえしもやけり
さまつる姫君はいはをえらびみまつりしがあはれと思
やすらひつゝおりふしをうなへんとおとけ神を
いまくらんしそそまつるに年は六十ばかりなり
なかたまへどもときのよくあらはしうたがひなく
そらにまひて人のおとにあそびのなきは上やあらむ
うちひかみほまくしきしとは思ひとりの人乃
物をもしまそめきこなゆるよしばかりなる
すもまじきてはせうし物語などをきゝて心をいふよ
きこしほどくれまきれなわれしらで語おほやき

わかくしほいとこまかみてさしもきすて画結り出よれ
ふ風すりともくほしいそくるきみかゝ乳飯残を人
なをもみさくまりはさうしくきすく庭とまつて参う
あわれなるおかしきこともまし使なりをなき道嵯峨
またいとけなきうんかうつし記はお様なりしさこう
いひしかほくましうなわてわかの思ふ事を心乃
まくかもえまゝ出しぬぞんるとなうくちおし也
そゝ志といひおはきそなけくさうしみえなし
なへての人ぶふめや濱よハ見えぬ世界な使ハよふ
うら新人もおりしかわとみるわしかはきて男の
猫志つまそいとそるりまう思やえくゐおやさられ

うち思ひおほりふをきくかもよけなきすなと
思ふまたくあるよわハ物志なれ卯月よなれぬ
むかへの浦さうさ見ぬ猫のかこつなどよしあかし
さまりえいほよ猿川よつかうまほ里いとあむを
いでとおしうきぶゐなわとおほさど人ほまのほく
まで思おかるほ下此おてさかおがし給ふして
見お猿京よわもち志きわたる浦ゆふらひ次く泉ゝ
あくおかうわれど庭のなみゆふ浦く釈よ海此上
きまわなく見えわふ底もはとなき道猿ふ須浦との
いふ巻れよ思ふ浦ひんく道猿ふ以ソんうてなく恋しき
あといひほうるともあくり傷なきんち志猿てたく

あはれおりしも庭には海(?)はあまお猿なれどもあり
り給かよなどの給そ、
わすと見る波のあはれさへおぼしく候
なく逢めぐまれ月ひさしうても逢たまいけ[illegible]
きん(琴)ひくふく給ふわれ出給てはうかくうなふかし
給へは清く清まひたてまつる人も庭[illegible]はうかず[illegible]
すわしう思わへ廣陵といふ手をあはあはわひ[illegible]
すまし給へふにりれとり人れ家も松れひゞき波の
聲よあひてんじ[illegible]人もあり志てそ思ふ
庭のあはれなることもききてわか候じきこゆれ[illegible]の
志も[illegible]人[illegible]しくそこ候[illegible]

廣陵散ハ琴ノ秘曲也嵆康花陽亭ニテ神人ニ逢テ傳之神人ハ昔ノ伶倫ノ変化可成

あはれ入道もえんでんやうぼうゆたかにていかぎ
らまほしうふかむきかり世の中もとわかへし思
おぬべく侍れば、わふかりひ侍る所のあはれさ候も
思ふたまへ[illegible]なくなくめで
まいらせ[illegible]清[illegible]のもわかく乃清あうびうれ人
入人のたとふえりいこゑ出しさ候時に
はきてよふめてしまゐらひしはわさ候みゆとより
りしめまわてまそうしぼよわりめまわ給しをと
人のうへをわの御弟乃様もおかしいそくれて
家のんちーしおはしまくになきなうし給へ候あ候も
[illegible]給すごまきて遊ある人はなかんごもやくめおへ候

クヮウボウ 三密六度ノ行法供養法也

入ル大命時ノ盲目ノ如シ
小右記云召琵琶法師令尽才藝給
少録云々寛和元年七月十八日
兼盛集ニ琵琶法師ノヲモニテ

四ノヲニ思フコトロテシラヘワヽ引アリケ田シル人モナシ

花紅葉 花云サ一所ハ眞ニ云ノ凡ニテノ事十七八ヤハイトヽコシリナキ海ワラトハ云リス時節ヲ云ニ友ノ一十七八

定家卿ノ云ヲ取テ見渡セハ花モ紅葉モナカリケリ浦ノ苫屋ノ秋ノ夕暮

二タ宮ニキテ打タクノ年ヤナ誰カ門サシテイレヌナルラム

せうへうびんしやうのこゑとうわにやゝすそのへた
びはの法師あふわていとおもしろうめづらしきて
小右記ハ小野宮実頼公ノ記也
ひとりふるさとにいでゝわざうけは蝉丸なれど、
すゝしひさおふもさなくいとしうる見思ひやうて
たわいとふしもやさぬ物のゆゝるおわりくるは
まうめもの名はをはりく此物のとこしほわかなき
うれたうなるなりし中に春秋乃花紅葉はうわなる
よわをたゞそこそこゆるなうし給ひわるけとも
なまめかしさまく身のうちすぐきたるは、うつのい
さして此のいまゝ遠ぬ都にほ田孫もいふゞ小ぬりはる
あとせ琵いとなほりしう花義なるらし給ひも御

延喜ノ帝ヨリ傳タルコト三代第相承ノ事
宇多院 本院左云
醍醐第四公主 母源唱於乃女
清慎公 村上帝
法院自ツ伊勢七代ナリ 命婦石河ノ女子於筑紫彦山遇唐人傳之奉授寛平法皇云々
又三代ト云ハ延元ノ后弟子ニ入道習テ有故三代ト云ヽ天平ニ直ニ習ヒ不成故ニ第十三経ナリ

於老作者ニ云法師筝ヲスヘケル女ノアタリヲ見ケルニ是ヲキカテハイカニト云ケレハ

松風ヲ耳ナレニケル山伏ハコトシヨコトニ

こゝろとまりて逢はぬ女のみ手のしきさ庵まで、
志とけなくひなたるうたのしられと御耳ならよ
の給ふとへるを給ひなくうちゑえておもばをよな
御はうしまはまなるいはこのか傳しむなりが
延喜乃御てまわひゞはくえさるゝを三代まなん
なわ給ぬる琵うつゝさ義方まそこれまれきこえ
桜まにま遠侍ぬふを物のもちよいふゞさ義おわくき
りまなうし給ぬるをあやしうまはぬもの給
こう志まんありうれ蝉丸うの御手ありうまひて
蝉丸ハ大ト云字ニテ帝 先帝トモ云
給ま逢山みまれひかえてよ松風琵きてわりにむへる
まやたのうんいのでまま志のひて浅うしめさきて

かなでゝゆるまゝにかうちもなくきこえなかへるおとす
座のめわ声をと琵琶ことゝもきこえ給ましうり侍る
おふわにほ義まきの跡とそかし座わたまふよ
あやしうせうしよわ筆を母なせひきとかゝ猫なわ
なかけがの御つえ小そ母なる君さかれなりの
上をよものしれるるを聞すちはそとわたてゝ
待ふふ人なしすべてたゞゆきのよふな我と書ふ
人にゝききなそでのん座わたりよのみあかをきこゆ
うつひまさめ竹へまく侍いとけうきなるゝとうか
ゆかでるいきくべき事との給ほきこしめさんおかは乃
そうわうハ侍らむたまへ行めしてもはな人の

花云文集ノビハ引ハ白楽天流サレテ江州ノ司馬ニナレルオノ一ハ
源氏モ流スニコモリ給ヘルオナレハ便アリカンビハヒケル女ハアキ人ノ妻ニ
ナレルモノハ
フルキスハヤストハ楽天
ノ云ルハ人乃秋娘ヲ
イヤシキアキ人ニスト
娘ノビハニモ達タル由
ヲヤ侍ラシメニアキ
人ノイヲ云出セリ上ヲ浩ヒトシオコス同し物語ノ作礼面白ク申ナシ
タル可成トゝゝ

入在カキアウメシタルイナ
ヤノミギレニ如トし

サイバラ　イセノ海ノキ
ヨキ渚ノ塩カイニ名
ノリソヤツニ貝ヤヒロ
ハンヤ玉ヤヒロハン

中将そゞふきつゝ御あとききゝりやせ人を侍はまた
ひとなんまゝとのゝ琵琶ひきよそはむね人ゆりしへも
うらく侍し琵琶わさくとゞらかふすかうな侍
かし来てあとすぢことかなんいつでたどふみ
侍らんわかきなくのこゑかまし侍その哥しらくも
思ふ人おはかれなりしが来つせうもみたけりしさは
幾ほくおほくも侍るあとすきぬ達ぞたりしを
おかしてさうの琵琶とかりへて竹をもかきよ
いとすぐしてゆいかり事かわいかのよふゆかしぬほぢ
ひきつきて手侍のひいとうらめきゆみたふかう
さと成しゝわいせの海あらの中ゆるきまたなおさふ

うらやひろりんなどあまた人めしつれきてなも
時こひまうしとまてこえまちうん路をおとひよ
さしはじめで参こゆ佛をさもなどめ侍らしき
さはめて参る世人小さきしひそしなどして
そのほうるまれ忘れしぬへ参れさはなわいたく
かけりまくにおはうをすゝさりて月も入うらふ
あるまゝにほはさわて志津のあるかとにたゞ物語
のちわなくやさしておの浦よりくりぬしほどの
ちかはつうひのちにより後はとみるさはの義はくし
やさでこれもとめれ有様とひずがわすれり参こゝ
おうしおものゝさればかなとき路ふしもあわ

いやしとりわかゝおぼえ記ずあまた我きこえうかう
なおよ世界よりわかてもうほろひおりしまうするに
もし年ごろおはしけりしのわか侍れ神
おとけれはそれひおりしはしてまいりしのちどけん
我もなやまし事はよやとなん思ふ路ふなとそれ故に
すみ吉の神我にこりしめまして此廿八年よ
なわ侍ぬめれまゝいのいときさうほしよわ思ふん
侍まそとしおとの春秋おどろかれ夢やさ侍り
まいらこかゝなん侍ふひるよふの六時はつとめよ
みづうしのからちそのうへのうひなへばさ御袖まで
たゞこれ人をたのきほいられへ路くせなん急ぐ

はるさめのよ比數にたかくてこそすゝちかしさ
山ぶきとなかはくゝめおやたかくて井をみもち
ゐまの人をきゞつゝかく舟船のよ比民ゆらなにはそ
えつるをはゞくさのこれとわまうるゞはのおやゆる
なにはゝんとうなしく思ひはをあきはむまれし
時ゝわたみむ所なんは侍るまして都のすめる人よ
すゝむと思ふんふゝ義りよわたどくふつきて
あまさのひとのうちゝをもひこれたあつゝきめを
へるわくもおほくはまどすゝにくはしみゆる
おりひはらは京のかまわいさはさ衣ふもえまうえ
はなんかくなりゝみすて侍なば波の中ゆともすゝ

うらみもとなんおきて侍ふなどすべてまよはすべくも
あらぬことゞもをうちなげくきのりのを
はまぐおほしはゞまるわうしはゞうちなみさ
まえはくきこしめしよこはまれはゝれあふわて
思ひうけぬ世界りたくよふもなゐのはえかりと
おかけるおほく思ひけるをこよひの御物語よきて
ありしはまへばよあさりゝぬさまのよみちまみり
ようえと宮ふなんなどうはまくさゞかよ思ひまわ
短くゐことをとまでいはぎ短いさわつゝん人やこ
えあれしゆうきよわよみはまなさもあちぶなう
春こなひよわかれおもとなくて月日をふるよ心も

心もくづほれにけり かゝる人ものし給ふとはほの
きゝながら いたづら人をばゆゝしきものにこそ
おもひすて給ふらめと思ひくしつるを さらばみち
びき給ふべきにこそあなれ 心ぼそきひとりね
のなぐさめにもなどのたまふを かぎりなくうれしと
思へり

入道
独ねは君もしりぬやつれ\/と思ひあかしの
浦さびしさを まして年月思ひたまへわたる
いぶせさををしはからせ給へときこゆるけはひ
うちわなゝきたれど さすがにゆへなからず されど
うらなれ給へらん人はとて

源氏
旅衣うらかなしさにあかしかね草の
枕は夢もむすばずと うちみだれ給へるさまは
いとあいぎやうづき いふよしなき御けはひなる
かずしらぬ事どもきこえつくしたれど うるさしや
ひが事どもかきなしたれば いとゞをこに
かたくなしき入道の心ばへもあらはれぬべか
めり 思ふことかつ\/かなひぬる心ちしてすゞ
しう思ひゐたるに またの日のひるつかたをか
べに御ふみつかはす 心はづかしきさまなめるも
中\/にかゝる物のくまにぞ思ひのほかなる事もこも
るべかめると心づかひしてこまのくるみいろの

かみにえならずひきつくろひて、
をちこちもしらぬ雲ゐになかめわひかすめし
宿のこすゑをそとふ思ふにはとはかりやありけん、
入道も人しれすまちきこゆとてかの家にきゐたり
けるもしるけれは御つかひいとまはゆきまてゑはす、
御かへりいとひさしうちにいりてそゝのかせと、
むすめは更にきかすいとはつかしけなる御文の
さまにさしいてん手つきもはつかしうつゝましう、
人の程わか身のほと思ふにこよなくて心ちあし
とてよりふしぬいひわひて入道そかくいとかし
こきはゐなかひて侍るたもとにはつゝみあまる
にやさらに見給へもおよひ侍らぬかしこさになん、
さるはそ
なかむらんおなし雲ゐをなかむるはおもひも
おなし思ひなるらんとなん見給ふいとすき〳〵
しやときこえたりみちのくにかみにいたうふるめき
たれとかきさまよしはみたりけにもすいたる
かなとめさましう見給ふ御つかひになへてならぬ
たまもなとかつけたりまたの日せんしかきは見
しらすなんとて
いふせくも心にものをなやむかなやよや
いかにとゝふ人もなみいひかたみとこのたひは

いはいたうかまびこなうは座りかいとうはなし
ぐまうむなまへをわきき人のめでさらんもいかゞ
あまりわむもれいたりむめでけゆるみまどなけ
らひなるぬ方九おとのいしうりひかなまは中く
よふあ浅ものとふるまふわ竹よつきて流ぐ家まで
さう小例のどうなまをせめていたれさくあきかゝず
ちあたるむるさ記れすみありすゝはふこなう床を
まぎらはして、

思ふ説んち後乃難座まよいまさみぬ人の
やうなやまむてのさ家りきなさ家なと座んこと
なきひとりいくつをと床ましうよせめきなわ、

京のちと和かえておりし比み竹へどうちちきまゆって
はりいふ毎も人めはくまし なまこ二三日へぞそはく
ほきくなるの菱りしそもれ法あるの比かの方と
やうに家よまうりしてわかくひとも和なしこ後小
しまぬ座ほとをしちりてりきうり竹に
まけなりつひこ後ぬう行おりひわがり ふ床事こと
こぞい座まじと和ほ申物りくよしきまからうして
いひし気ちもめぶ家しう年らわこ後つけて
あらん城めれまへよおりひるの座んもいしく和しう
おかしめぐるされて人すゆん第りなさう床方やくも
まむらりしてんと和事まと女いたる中く座んこと

アリスヤトムスガテラ
アヒミタバタハラレテシ
ニテゾノコイシキ

スニノ先ニ三ヶ月ツカルニ
十日ヨリ十四日ニ上ルト云ルニ付テヨハ
リ玉ヘル所～モアル
トキ云々

大きさいの人よりもいかに思のほかなりて給へけるよ
まそかしやうのまさはんくるへきそかすきむ院家の
ことわりの事なき儀へたてゝはいよくおほえのなく
おもひ定えていひふせましたるつまにをかるも
あはれなるおもひてやむりへまわてましとおほし
よはゆかしくあまとさわともうくそやまとしを
めさまん以きさうに人わろきさまをなへかるおほし
志はめさわらせとしおかやきありものゝはらし
しき里てもれさはりしきさとおほりわ三月
十三日のみなわひのめきあけをはらへかしき表
みかとの御夢よ院のみうちおまへのえりしの

或ニ古院ニテ三給ニ
尺合給ト云給改云
目ヲ頼ミ玉フトし
花云朱雀院目給
ハ三条天皇即位
後目耳目不明ヲ
思ヨセタル夫ハ民ア
ノ元方カ霊ナキ又
寛算供奉カ霊
数ト云リ僻言し

許またさせ給てはつ気色いわれうてゆうえきこえ
させ給ひしにまわておもしまはやはしさせ給ふ
ともおもかうわ源氏の御事ともなかなかんなし
いとおもくうれとわもいつおもしてきら儀小宮し
させ給けまた雨なとかわかうみつまた夜も思ひ
なしみゆるこそとさうたてまつく志きやうみつり
こおもしおほそくゆるしきうちきくえ給ひるえ給
し小児あはせ給ふとうしけりや清め小まふしひ
給てえかくさうなやこ給御はしみうち小も
宮小もおもわなくきさ給ひおほきさとうを給ぬ
ことりの御殿なまかるはなくく小まの陰かる

さはかし哉うす源ふ大みやもうしろの光なう
まゐらひ給そなとさまざまよりわ給やうな御門あり
おかしかけ奉ほまくなりな我これ源氏の
君まうとや我かまへしとなまめにそかくしはむかへ
かなしれにれむくひかわなんかゝる母おほく侍ふ
いまはいな我もとのくるゐなも給ひてんとよびく
おかしの給を世にもとゝまり給くしきやう成へし
はえよおちて親をまかし人我三年我うますく
さひゆ候さまんことはよ此人もいつくいひはてん
侍らむなとと給りこうゆきめ給りおかしそゝ候
ほとつの月日かさなりて侍なやうともいつまくくよ

スコノ太三心ソノシノ比风ト声ニアタリテ手生し

我もまた涙さうせたまふおほしゆく御前はかくいたく涙
風のおとなりひとつの事をまめやかにまりのきひ
しうてへ后かもわかくあなたよりを焼かなかく
まぎりして我ち菜にをまとの外そわかり給りん
あとをすはあ御ましうおかしたるをさうしみちこ
すそあり思ひしほべくものいのとくちかしき
きみの母なり人よそかわりまつわな人これうち
やけおとありはなてさやうなる候ちうあすらふ
まさをもすなまそ人うるにもおかさまさいんもの哉
我をいかしきととの思ひをやうつんかくとすひなき
かにを思へまちあやたちえよこもまそすくれ年月

こゝろあひなどのなんふりすゑらるゝ様ゆめ思ふらめ、
中こなほんなやはらくさんと思ひてたく出うしよ
おはせんかとおぼしけり女たうわをきこえうはさむ
こゝろなかりなる御年ごろ給ふことのみまでいはうは
さる人の御ありさまをかのうにもみ奉らむなど
まつるのうちおりひとしく思ひうけざりし
清き所のみそまかなる御どほれうしもえなきに
あき物ときこつくし給ふきれ様をも風よつきて
きよ河をうまれ清有様おかきのなりつでうくまで
よにあなものとおぼしふかめるなどこそかへる
物まの中ありくちぬふこにあまなうことなきなと

おのづからいとよくちをしうて経もけちうき
うち思ひすぐすずおやなちきよくらとしう様の
物のみれりかふへき我おりひなりゆくわうふみを
なれさゝおりかきさんへさうんときいとなかなかけはまよ
そのきんと思ひ所のうちしくそめて大義人心ろ
きこゆどもつ様うりすもあはへ義りなめり
ゆくしぬかとけ神我みれことまちて人の御心我を
すくせをもまうでなどうちの思ひみつきふわ
また一ふしう様のなくれ昔りみれものくさを義る
いやさうはきのひあくようなとはかのおなし思ひて
また様しき日えんきそれし末比やうく思ひけりつぬを

きていまは分子どもなをとみ志るきは心ひとつなり
なち井うしなくばくわまは済ちひて十三日此月
花屋ゐにさし出たるよ分へわりまれとまうしたわ
まえは義乃お旅屋とおほさど清な路しまわひよ
清くろひて長ふりていそ旅御車老ふ年く
はくわたま道ど所さしとそ御るまて出旅これよ清
なとりわなさ分へりを旅屋てとなくい清浅なりわ
みちれはとも夜りの浦ゝみわゆ旅ておりふとち
みまの所きいわえれ月うけゆよまほこひしき
人はれきと我思ひ出来きえ旅り屋うてもまひよ
まきそなもむきぬへくおかれ

秋の夜はつよけ乃鈴よかりのこゑ雲井に
かくれ時乃まもりんかおもひとわこたま道旅はくまゝ
はまこふろくいたきとゝ路まきさそみとゝ路あは
はま井なわかえのつゆをいつのめしうかなり路く
こ道はこゝ路ほやなさみえふさ路こてに井て思ひ
おほことそあつしとさふむとおかし屋にゆく
よのあされなかに三昧堂ちうくてかのお店松風よ
ひくよあひて鶴のなしうりおひするま市の
添ふしもこ旅りへあは清まなわお載ともみむしれ
寿をつくしゆわこゝうしこれ有類なとは読んで
むまとめはま婦するうるいんことり見の来て月

月入タル槙ノ戸　花云青表紙ニハケシキト斗云リ　明石ノ入道ノ源氏ヲ引導ヤニ付テケシキ計ト云リ
源ニ戸口ヨリイラセ玉ヘト思ヘル心ムケニコトサラ斗アケタル心ヘケシキコトニト云ハモトヨリ召引奉ルウヘハ
是ヨリイラセ玉ヘト
ワザトカニミシシアケ
タルヘシ　或説氏ニ某代ハ十キニアラス人ノ好ム所ニ可随也月入タルニキノ戸口ハ源氏来ヘト定家ハ
ヤ待トカヤ入道待ムカヘ奉シモサシ過タルヤウ又心ツカヒナカランモイカヽトケシキ斗アケタルナリ
槙ノ戸ヲヤスラヒニコソ
サヽザラメイカニ明行
秋ノ夜ナラム

いれたるまきの戸口けしきはかりおしあけたり、
うちやすらひなにかとのたまふにもかうまてはみえたて
まつらしとふかう思ふにものなけかしうてうち
とけぬ心さまをこよなうも人めきたるかなさしも
あるましききはの人たにかはかりいひよりぬれは
心つようしもあらすならひたるをいとかく
やつれたるにあなつらはしきにやとねたうさま
さまにおほしなやめりなさけなうおしたゝむも
ことのさまにたかへり心くらへにまけむこそ人
わるけれなとみたれうらみ給ふさまけにもの思ひ
しらん人にこそ見せまほしけれちかき木丁の

聞ニ其ナシテモ心ナヒ
ナラシタルトハ入道ノ
弾ズルト云心モフク
メリ
古今ノ六帖ニ
今サラニムツコトノ玉ニ
ハヽリ若山路ヲ
ワスレヤラナム
ムバ玉ノヤミノウツヽハ
サダカナル夢ニイクラモ
マサラザリケリ

ひもにさうの琴のひきならされたるもけはひ
しとけなくうちとけなからかきまさくりけるほと
みえておかしけれはこの聞ならしたることを
さへやなとよろつにのたまふ、
むつことをかたりあはせん人もかなうき世の
夢もなかはさむやと、
明ぬ夜にやかてまとへる心にはいつれを
夢とわきてかたらんほのかなるけはひいせの
御やすん所にいとようおほえたりなに心もなく
うちとけてゐたりけるをかうものおほえぬにいと
わりなくてちかゝりけるさうしのうちにいりて

いふてふこめきこゆるかりいとつよき様してもなし
うちつけぬはまなかわさまさへもいひてては
なつむ人さまにいとあてやうひえそら様すれはしさ
きりひかしなかりはなちなかわかる契をおほきを
かもあさりへ先年わ侍あし様さしのちにまさわ
もちなる庵しはまいいとしき秋のなかりなもとく
陽めるんちもまた人よしろれしとおもはもこう様
おえきさえすてあまうまうらひ夜きさく出猿ひぬ
付かくいとしのひてかくふいあ様猿ひなき侍んの
おまなわやあつまもう新さをいうそもこさしと
はくみそはほりひことくしうもしてなきぬを

むまいさ庵おもへわかくてのちえあのひはく附く
おはもほとたすしたふれたるになの侍りるまし
いひはかなまはまのこりやたちましらん心おほ利
まさかふ猿をされいさとおりひかなまふ様をかくま
ゆうなくん嶋あへ花も極楽にたいりひをん末法まて
たゝあの侍霊と浅待すよりはとさるにあう様を
みさ様もいとしくおもしけなわ二條のききれ風の
はそかもかわ空猿りんすえたなかまゆきもん此
海くあわり様と思ひうとまれしまらんきんくあしう
まはしうあ侍さ侍くもはなかちなる侍んさしの
猿あわりし部様るのあとなかさはりふんとく

ニレジトチカヒシワヲ
アヤニタガ三笠ノ
神モコトワレ

めぞうらみ竹くへまし竹にあどておやなまじ文ともさひ
ごとにはきてもさおもりまじすわくんなどくつをうん
き歯ほしう人のはうき歯をみ竹ふりはきても
きひしきみのなくき世かさぬるれ例すわもはふと
こ歯やうありきさ給てかくありまことやあなうる
んよわかあるなかさわるすそうとまれなわし
かしぐ我思ひ出るさんむまい義よ人おやしう
猶はうかき夢をしうみ侍しがおう学ゆるといはば
うらわりへてそなまんのかとはおかりあり移よ
ちりひしあとをなどうきそ何事よつきても
むかくやうきはうなうゆうわすめれ又る

彼ノコユルトハアダシゴヽロヲ
ウナリ
君ヲヽキテアダシ心ヲ
我モタハ末ノ松山
ナミヤコエナン

花云六云ノユイ名物也
ト叶孔十七人今又アラ
ススギ三テ海ニイラ三
ホシ見ヘハかけ夫ヘ
経紙　画凡
シナシノハ君トナラヒノ
他ニコソカモナケワ疋
人ニキ白レノ

めでたきまの世さひなまとも心うはるはかくわかなる
おう給なくらうりけにうおてたそありまよのひうる
たる時夢うふありはきても思ひわたるき雖まる
もとおうかうあを
うるなくもおもひきるうな世みわし我まは
まわなとはこえしも此うとおひらうれぶ猶うる
たくなくれのとめ給へる我いと志ようち画りく
見給てあらわひさうきみひの猿をもし給りは
世思ひしも志あきまはまうとは常もあけは
へよんもちすぶ中くは忽しの逢なあおやをうわ我
我りきりのまていは乃よか人あ見くかある

へし我身とは思えさせしかどだにこころの中もなくて
すぐしけるとし月はわすれ給ふ心をかなしまし
くんかうりいとしう物思いしきよふさめあわけまと
よそなりけるをりのまさおりひしまわもよ後侍り
すぎし春きとなごりけまなしてふかくなりぬ
さ後有りみえ古今集義とは月日ありそへて物かし
ませばぞ紫んきとなまかされおもひのなくて葬
月をすゝし給がたくなりけるうち思ひをこ世給
らんがいとこ後なるしなるはひとさぶかめて
ゑし給鏡とまよくの義おはめて思ふすとも哉
うなつきのへわらしきくは義はよさなし給へてき

こん人のわれよきもかぬべきものくさ後なりいうそて
ちかにすよふ給心かなんと条のきこも物かのまよ
なく春うしなくおほくあはおく於なしやうに
給をきさは侍め給はく座りてわの時給を白記の
やうなつき給へ星りの御ほ成八義御さ後ども御けり
はらん此しも御りわぬうちに侍くはわせこと
あわて世中さ後くよのひきさふだにの君こは
古大たのむ延喜醍醐此女御の御りし小男みこ
むまれ給へる御子さはよなわ給へたいとい(い)たけなし
書売りこうは御はかやとめおれぬやき乃御
らし給こなし世をすてまで門在も人をお侍し

めくりありこれハ世しのかくしつに侍ふこと
いふもあふこしうあはれましきことなれハつ井ハ
旅の空しきぬ地もなくまてゆふされたまふへしま
さこめ出きぬこうよわ多さまも侍ものけなやみ
給ひさまくのもなくさとしさきをそは於しき
侍はくきえんともをさ志於きるしまやよ給きやう於りし
まし侍る侍めれなやミさへこれうわ知まくなふこせ
給ても此ちう給侍りくおほされ侍七月廿よ日乃
あさふ又なふさて京へり通りを給へ参富者もこ侍
つ井にりなおりひしうそよれつゝ参につき
てもいつふなかりにつ参りりとみけ記給なう

まはりなきはこれし残りうへてもえこれうらを
ゆきのみと思ひたまふまんことはおりしなけをふへ道
さかへ参こゝゆく思ひなうこうちきくまわむすかる
うわておかゆきと思ひのおとさり人皆そこうれ
わかおりひのおなき中はあこめなと知りひなはれ
まこう給えよりれなくりたらひ給六月りわまわん
あるしきおきわてなやみなわかくわの道行へき
程なきハあやふくなかるやわわなん侍ゆまわも
京ありおかしてお侍うりの思へきみを何わ
なるうなとおかしみたる女ははうふもいりと思ひ
志侍にへうわいせもとりわ侍思ひ乃かのにうたし花

やちよりてたち給しかどつ井にいゆきめぐれ
きなん心のうちもおかしなくうめきこゑたひた
うれしきうる御いてたちのみ座人の人にまへる
西まとおほすに気なわさみつぬ人ともほどくに
はきてはよ給ひ思ゑすわと清むの人に人て集り
んちよけなる夜をおりしの入ゑなみさよくれて月も
ふちぬかとさん若なる死れ気色よおぼやんはかう
いま世うしもすゞ法なるちとゆきえんをりふら
あまらんとさまく小おかしみたまたる残ち給
こまでふ人にはばなめく例れ清きをかしとみまかむつ
うらめかり月ころいつ遊人りくしきえんを清時る

りひまの紀まぶどし給へふはまなきせうのこ給あや
にまよ中くの人氏んほくしかとぼえまろふか中納言
ありへしてやおし御でしりしめれあとふとさしてめでき
めつるをまだくなるは思へつきおさそたかわになわて
まかれやうりいたくもふかきでわうわたまへまえ
さうやの心もまじみ給りぬかうちなとの空よしく
ありけうりき清すしてめふまんしうもほわかかふ
すかとみはそでうえくちおしうおかさ湖さらるへまよ
さまよそむかへん心ろおほしなわぬさやうよう
かさらひあくさあ給ふおとうの清うさち有様なる
さう心もいろはもと寿は御なとなひりいたま

おも屋を竹へはしもいつとなくめでたなはかなき桜
にそこ様ぐはしげな御気色ありうち涙をえはしく
先ふかくちぎり竹へはそだくおぼしめさるゝまゝ
までもなとかやまさらんとまそうち泣めきとめて
何ぬめしも我身乃なとを思ふにもはつかしきなれ
こゝ秋の風にそなたの心さしとなれは塩屋くゆるわ
すはうにゐなひきそとはあはめさる末乃はまなれは
しほひの衣ぬれともほしは屋く煙たえおなし
なけりなひけんとのたまへた
かきつめてはまれたくのおりひにもいほそ
うひなきうらみにさしはそれようちなきてさと

ずくなはなれしさは（へ）まかり乃はいかへなと
あさりしは心ぞみはよゆりしかわたふきのく
ぬなとさしにきうを奉りさわはふ我ゆるしうにしる
むさるいおしみもしのふはうかのひとことを
きふとの猶く京よりまそれしはしたましきんれ
はあとゆるつかにはつりしてこなたさとなむまいらへを
なのりかりぬなるしたまへはふの寿よれ色めかふ
まはたとへむすなしの色をえて心はうかきしの
ことしゆえさし給ふまひうはりしもいやくなかくさ
さへたゝのりきまそとふむへきうさなたよさそは
はしなるへしもとのひ屋のありきるへたるおとひと

よをめぐみたまふ人の家の中をたていはの
みなもとに思ひきこえさせ給ひけるをりしもはな
めでたきくにのこるゆきをかきちらさん思ひ給ふ
はしるはかなしとおもはなき御あとのをなか
あきはゆくまでひをすましこる給ひかまゆ袋露
まされぬこるに清きこる給ひけしめてあきれに
なほりしうきぞみてなきたまそぬてなどやさしき
やましき程をひまなしほどあらばおほさる
まも月は雨とまのそもまたなきまつらんと
くやえずなかさきこる給の人ぞわゆくけ袋の契を
のこし給ひ哉むいまこそあはせらるまでれかこそ

ゆきのたまふ女
なげさわたりしあめはそくめならひとまと給はぬ
きぬはるのやうけて思ひけんにふかなきくちすさひ給
うらみ給て
世まてのうきみになほならゆ中のをのきみてを
ちとりあけるそらあせてふれひたのぬきさ給り
あならむあひさんとくぬめ給ふめわされゆるたく
りのまんなとのまわなきをおりひもせるならもりと
ことりわなわちかおわるはきいとまぬひくを給て
はむりんみ人とまもさなりけまはんもうくなまとと
人まをけからひて

まくらはてゝたゆもなしき浦なるのなごりは
いまとおもひ出ずるも浦かへりみ
とし月はるゝとまやもはまてうちなかんのゝへ所
うちやみ残たくへるしかうちおもひの所まし
あるをみ給ふよしの御ひ給へ出でけ給くせらかまね
まうで給うぬ人ゝもな残りの数はも殿舟にまうで
かくしう給ふかゝいふむかしわかなまたまへはをしそと
あはれも見きもあはれしと捨てしなとのたまはすまよ
かとはなりあらばかはれもなめわかし出ゝのぼらず
思ふうましき心もけよるふを限りし死なきを残
わかはゝうなと出りはさくちく志かたまいひ

あへなこゝやくもなめわざ見なまゝはとそなん
へ道ゆふのはまうけゆといのめしうつかうまは
まわ人ゝこゑりの心ねまて捨のさうゝくめはゝしさき
はまなわいはかのまかうしあへんくんとみえあわ御
まうひをいふへくもおもひみぞひはゝまたうけさ
海らかはまゝとに都乃はとよこはへさしはをくわ相
ともゆへははそ思ひまうぬを底乃しうふきはへき
うわのはさうぞくあり
よる浪よりなちぬさうふ捨たるこゝかどけし
とや人のいしうんとゆう残は流んしはうそはへ
うしろれど

うらみまうすに今夜の里なくはあふにこそあれ日かげ
へだてむなかのこゝろもをとてこゝろさしあはれなるとて
まはりに御かたりなまめかしけれどもきこえけり人なくは
そひとゝまりのりまたまふ八月十五夜をうちふふりつゝ見
なまめかしう哀ぞよろしのうちわたりのなみをいつく
人のこゝろはまことにあさましく入たいあるかとつかへむまで
待わたし御くまもとものふの御事ともくわりけり
まほらぬものともなとやむてかひをはくふをいとおし
なかうきまゝな人をわすれぬへし
よそかみこゝらさかしむかしとなりて我こそ
後をえこうてなきはこゝろもれやかんさいかくまなひぬ

へく待まほしけれはまてふとやみてほのくらき
さ夜なかまでおかしいそさせ給ふおもはれ給へなさけ
気近き御けはひしうものを待出まほしと思ひて伝へ
うちわたりみ給へ御しゝふるのかはらかといりんうる
なく見えし時おりひはそうきすちもあめまそいは
いみてかなかな哉しき給てんめほとをうつ見給
うきまいうしすへきとて、
見やこゝろし来れなけれはとゝめやとし
心ろうくをおぬる秋とてなしのさかひたまへ人ふに、
いとゝ御覚えにしこかたましるさるゝもおさまりう
よそかふさらしみのこゝ地もなくかなくて、

かうしも人にはみえじかし思ひしのぶもまどみのうきを
もとめくわわなきるゝなきかゝうちはそたまへは
妹の屋かゝなれに西のけうひてまほまりたきまゝ
しけ浅茅とにまゝなみこえりしのめわざとしても
なくなめまひてかかゝすくこ絵ほうしなる事を
思ひそめたんずべてひがくさきひとふるこゝうひ
きるんのなこうわうといふ何ふあまやおかしきつ
ましきことをりのし給めれえぶわともおかは所
あらむ思ひなくさめて御ゆなどをぶふ菜まはな
ゆしやとてかさすゝふよわぬうわめれとなて君
なとひかめはきつ絵をいひあはせほいはしか

いうそ思ふさ海中くみえまうんかな葉月をみれえ
さしいまや思ひうかぬとこうたのゝきこえは逢ん
くれしきうつ城も物れはしめにみえるうれかう
なけきをたえるふもいとおし逢いかゞほうてまそ
ひる昼日ことゝひいをのゝ孫らし覧えすくよのふ
おき井てすゞのりゐもこゝろなわありうわとそ
きを深しいわてあふぎ井ゝわ男子ともにはぞあ
らきそ月表よ出て行ゆる物を庭わみづふ
うれいわありうわよしあはれそのこゝろはありゝ
うしもほなうこなひてやえぬしたるかとありなん
ほうしとのすの記まかる君はなるまし也うたまわるわ

りて御はらへしてすみよしにもたいらかにて
いろ〳〵の願はたし申へきよし御つかひして申させ
給ふにはかにところせうてみつからはこのたひえまうて
たまはすことなる御せうえうなとなくていそきいり
給ぬ二條院におはしましつきて都の人も御
ともの人もゆめの心ちしてゆきあひよろこひなき
もゆゝしきまてたちさはきたり女君もかひなきもの
におほしすてつる命うれしうおほさるらん
かしいとうつくしけにねひとゝのほりて御もの思ひの
ほとにところせかりし御くしのすこしへかれ
たるしもいみしうめてたきをいまはかくてみる

へきそかしと御心おちゐるにつけてはまたかの
あかすわかれし人の思へるさま心くるしう
おほしやらるなをよとゝもにかゝるかたにて御
心のいとまそなきや此人のことゝもきこえ
出給へるをおほし出たる御けしきあさからすみゆるを
たゝならすやみたてまつり給ふらん身をは
思はすなとほのめかし給ふそをかしうらうたく思ひ
きこえ給ふかつみるにたにあかぬ御さまをいかて
へたてつる年月そとあさましきまておもほすにとり
かへしよの中もいとうらめしうなんほともなくもとの
御くらゐあらたまりてかすよりほかの権大納言になり給ふ

ワスラルヽ身ヲハ思ハス
チカヒテシ人ノ命ノ
ヲシクモアルカナ

程モナクモトノ位
花云配流ノ人召カヘサレテ後六年ノ後出身ノ本位ニ叙スト八虐ノ位ヨリサラニ叙スル歟 但三位以上ヲハ奏聞シテ別勅ヲウクルハ時ニ随テ不定故ニ源氏最初ノ出身ノ位ニ叙スルニハアラテ此ホドノ官位ニカヘリ給トニル此間ノ位ハ宰相ノ大将ナレハ則本ノ官位ニ改リテヤガテ権大納言ニ上リ給フトミヘシ
数ヨリホカノ権大納言トハ
花鳥云職員令云大納言二人トミヘタリ 然ルニ今ノ文ノ如キナラハ二人ノ外ハ数ノ外ナレハ権ノ字ヲ可加 寛平ノ比識云大納言権正三人ニ至ルコトナカレトイヘリ 延喜ノ比ニモ三人ノ内ニ権官可入ヽヽ定官ノ外ハ何モ権ノ字ヲ可加ニヨリテ如此 中比ヨリ正一人権十人ニ至レリトミヘリ

續日本紀 寒灰更煖枯樹復栄

なはつぼねのひとゝせさなへのまゐわハかとの
つりきつへしたまりわよふゆなさなくなとかまゝ
あまへし木の葉りあへなんちしてけとめてけ
なわめしあわてぞちりまかなれまへよ傍ふるひ
給りてひまきまそいりてさなもれむほ為しき
にまぬかとしへ給はるむとみまる女房なとれ院乃
帰時よわさふくひそだいしらんなどもそうなし
くそびと文よなさきさはざめそで思めしへもそばりう
まんれりしめされてけまうひなとこともふひるはく
ろひていそおりしまは御くちまめなさぞ白ころ
へふきを給けきは川くつかと格へさまを我へ子を明白

なふかすうしよ給ぶやおほ御まゝなふは猶後まゝめや
うふわわて秋よいりぬ十五夜の月おりし給う
土佐よなにまよ著れあとの義をばしおれ出るまで
左本にまさを給もれんかうくれなさ給しすなへし
あらひなとも申にせうしきうしもの孫なとも
きりてひさしう歳よきなるすなとの給をはるよ

花云一本ニハシヅミウラヘトアリ…シナヘウラフヘハ初思ヒニナヅムル…
ヒルノコノ足タヽヌハ三年ニ於ル…日本紀ニハヒルノコ…
舟ニノセテハナツトハ…
後ヘ…ヤナガナ夫…
ズメ…三歳トス…ヒルノコト…
胡…カゾイロハイカニアハレト思フラン三年ニナリヌアシタヽズシテ
わるは海へり…ほにうりまこひふもてあれあ
花云太神宮造替ノ…
…古抄モ…
ヒル…ハサ一年ヲヘテ作カヘラル…
アレバ其…宮柱…アフトヤ…
アル…ニシキ…
但メクリアハンノ礼…
ニ云リ
たくふわしとりへかくわと歳くゝえ給へたれし
まのつまゝかんそ傍のしうおほさまそ
宮りしらめくまあひなに時しはまゝはなし
まれうらみなこはかいとなまめりしきれ有様なれ

院のたためは法へ禅をまるかけるへ孝也とまはれいう
うを給へ恵家徒らまわ給へりこまうくれよ正慈清を
給ひてめつらしうおもりし悦たるを猶ふかく先と思
うそまほわ給に清えもうよなく倫さうせ給てよ哉
たまさ努給まん小まくうわお縁まし也おし返
思て清を給ふ人の尤乃みやまも情ん便うし志ほめて
清對面は我とゐもあされ家のうちともあうむりし
識やはの石まは後ふ波よ清菴と清女はゆりんひさ
みちまのふきき給めわ清のよ原くいうふ
歎はゝはりしの猶よ銃秀はさう屋とひと哉
思ひ屋うなうは帥乃むさあれ君節あいなく

人まねのもゝひためぬふんちしてまくなむ
つくうきそさ御をなわ
五節ほまのうきこ給をよきし家人は屋にて
またき係袖をみをりやてあとこよなくまさわり
なわと思ねほき給て清いは
うへ里ては我おもと屋をましうをた思し名おれ
袖のひうらわしをおうはおりしゆうおかし
あこうわなれはおと給おさまた給てゆやくおもりし清
まとこれうそさやうの清みうまひさうに清く思
給ふめわ花ちる里なとみもたて清きうすくもうる
みくおかはの清のなく中くうゝ見しけるわ